

---

# オレンジアイスティー

片桐 雪耶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレンジアイスティー

### 【Nコード】

N7273D

### 【作者名】

片桐 雪耶

### 【あらすじ】

長い間抱えてきた、叶わぬ思いを断ち切るために、私はみずきを呼び出した。

**(前書き)**

初めての投稿です。最後まで読んでもらえたら幸いです。

もうやめようかなくて。

思い立ったら止まらない性格だから、私はこの恋を終わらせようと思う。

日曜日の午後3時。ちよつと前。

今日は天気がよくて、太陽の光が雪に反射して目を射す。店の中にいると忘れてしまいそうだけど、外は今年一番の冷え込みらしい。

行き交う人達は、顔を赤くさせてどこかへ向かっていく。

私はコーヒーを一口飲む。もう残り少ない。

みずきが来たら次はアイスティーを飲もう。

もうこの店に入って30分は経つ。ちよつと暑くなってきた。待ち合わせは3時。みずきが遅刻してるわけじゃない。

私は窓際のテーブルに座ってる。

窓の外は大きい交差点で、たくさんの人達が一生懸命歩いてる。その中にみずきを見つけた。

なんで私は、こんなにあいつを見つけるのが上手いのかな。

まだ横断歩道の向こう側。人込みの中で、微かにしか見えないのに。

ねえ。私はこんなにあなたをすぐ見つけられるよ。

こんなに好きだよ。

ねえ。

こんなに好きなのに。私はあなたを諦めるしかないんだね。

みずきは笑ってる。

だって隣には恋人がいるから。

「ちぐさあ。」

「横井。」

ふたりが店員さんに案内されて、私のいる席にやってきた。

「ごめん大越。一緒に来ちゃって。」

「いいよお、全然。私も、水城と横井、両方に会いたかったし。」

「そうだよお。何謝ってんのぉ？3人で会っの超久しぶりだねえ。」

ふたりが席に着く。

「みい、何飲む？」

「んーとねえ。あのー、泡いっぱいなのやつ。」

「コーラ？」

「違うよう。」

ふたりがいつもの調子でしゃべり始める。

何度見た光景かな。

ふたりが付き合い始めた頃は、高校の時の名残で、よく3人で遊んでた。

ふたりが仲良くじゃれあうたびに、私は苦しくて悔しくて仕方なかった。

私の方がみずきを好きになったのは早いのに。

なんで???

なんでそこにいるのは私じゃないの???

みずきの1番近くにいるのはなんで…。

それでも私は、ふたりが付き合い合ったことで、この報われない思いが次第に薄れていくんじゃないかって、ちょっと期待もしてた。

いつからか芽生えてしまったこの思いは、もうどうしようもないくらい大きくて、深くなっていったから。

成就されることはないって、わかっているのに断ち切ることはできなかった。

それは、ふたりが付き合い合ってから変わることはなかった。

むしろ思いは強くなっていくようでさえあった。

「ちぐさは？コーヒーもう無いしょ？」

「ああ。えと。アイスティー。」

店員さんが注文を繰り返して、席から離れていった。

「大越。いつからいたの。」

「え？なんで??」

「コーヒー一杯飲み切ってたから。」

「あー。そうだよねえ。ずっと待ってたの？えー??でも、待ち合わせは3時だよねえ??」

みずきがケータイを見て時間を確認する。

「買い物してたの。昼から。で、ちよつと疲れちゃって早めに店入ってただけ。」

足元に置いてあったシヨップの袋を見て私は言った。

「そっか。」

相変わらず鋭い男。耐えずまわりに気を配ってる。

大丈夫だよ。

みずきに会うのが楽しみ過ぎて、来るの早過ぎちゃった、なんて言わないから。

言えないから。

「そっかあ。今、軽くバーゲンやってるんだよねえ、そういえば。悠太あ、映画やめて買い物にしようか??」

店員さんが注文の品を持ってきた。

「これから映画観る予定なの?」  
グラスを受け取りながらふたりに質問する。

「うんつ。あ。ちぐさと会つのは決まる前から約束してたの。ねっ?」

「ああ、うん。よかつたら大越も一緒にいく?」

「あ、そうだねえ。せっかく久しぶりに会えたんだから。行こうよ。」

ふたりが笑顔で私を見る。

そう。

ふたりはいつつもこうなんだ。

なんの疑いも無く、迷いも無く、自分達の中に私を誘い込もうとする。

そんなふたりが大好きだけど。

「ごめん。私もこの後、彼氏とデートなんだ。」

ふたりがびっくりして顔を見合わす。

「…今日…言いたいことあるって…そのこと…?」

「うん。最近ね。ふたりには直接言いたくて。」

グラスに添えていた右手を、強く掴まれる。

「ちよっ、グラス倒れるっ…。」

慌てて左手でふらつくグラスを支える。

「おめでとう!!ちぐさ!!私うれしい!!ねっ!!悠太も嬉しいよね!?!」

興奮気味の彼女を見て、

「うん。まじ、嬉しい。」

そう言っつて、水城が私を見る。

「おめでとう。大越。」

真っすぐな目に少し苦しくなつて、顔を背ける。

「ふたりともおおげさ過ぎだよ。彼氏のひとりできたくらいで。」

掴まれた手を解いて、アイステイーを飲む。

「だって。今まで、誰とも付き合わなかったじゃない。いろんな人、ちぐさを好きだって、告られたこといっぱいあるのに全部断つて。なんでって聞いても、別に、って。ずっと悠太と心配してたんだよ!?!」

「泣かないでよ。」  
「泣いてないよ！」

涙目の彼女を前に、私が少し困った顔をすると、水城が彼女の頭を優しく撫でる。

「でも、ほんとだよ。ふたりでよく話してたんだ。大越にも早くいい人が現れるといいねって。」

「うん。ありがと。」

そう。

ふたりが、お互いを想うみたいに。

自分達の大切な友達の私にも、素敵な人と恋してほしい。

そんなふたりの思いは、痛いほど感じてた。

それはすごい嬉しい思いだけど、私には苦しいことでしかなかった。

だって、私が好きなのはみずきだから。

あなたただけだから。

私がもしこの思いをぶついたら、あなたはきつと真剣に考えてくれる。

私のこと。恋人のこと。

私達3人のこと。

いままでのこと。これからのこと。

でも、どれだけ思い悩んでくれたって、答えは決まってる。

あなたが私を選ぶことは、たとえあなたの恋人がいなくなっただってありえない。

私とあなたは友達なんだ。

この先いくら一緒にいても。

私がいずきの1番になれることはない。

私のことを、とても大切に思ってくれているふたりが大好きで。

でも、その気持ちと、みずきが欲しいって思いは比べものにならない。誰にも言えないこの思いが重くて。

苦しくて苦しくて。

だから、もうやめようって。

この恋を終わらせることを決めたんだ。

ウーウー。

テーブルの上にある水城のケータイが震える。

「あ。悪い。」

ケータイを持って、水城が席を離れる。

テーブルには女がふたり。

「ねえ。ちぐさ。」

「うん?」

「ちぐさの彼氏、今度会わせてね。」

「うん。ん〜。」

「なに?だめなのお??」

甘えるような目で私を見る。

「だめってゆうか。人見知りな人だから。それに忙しい人だし、私もあんまり会えないんだ。だから、紹介できるのはかなり経ってか  
らになるかも。」

「そうなんだあ。うん。いつでもいいよ。いつかきつとね!」

「うん。」

いつかきつと。

死ぬまでに、きつと一人くらいは私にも彼氏ができるかもしれない。  
その時は、きつと紹介するよ。

「そっちはどうなの?聞くだけムダかな。」

私が聞くと、彼女は少し照れたように言った。

「…なんか。なんかね??最近…、け、結婚??みたいな話がちょ  
っとリアルになってきたの。」

「えっ…???」

「いや、まだまだよ!?まだ全然だけど、なんてゆうか、…うん。私  
…この人と結婚するんだらうなあって。」

「…そっかぁ。」

私のなかで、なにかがぐるぐる回ってる。

出口を探して。

結婚…。

結婚…？

店の入口で、壁によしかかりながらケータイで話している水城を見る。

そっか。

そっだよね。

私のみずきを好きだろうが、この恋をやめようって決心しようが、ふたりには何にも関係ないんだよね。わかってたつもりなのにな。

水城が電話を終えて戻ってきた。

「ごめんごめん。」

水城が椅子に座ると、

「じゃあ次私〜。」

と言って、彼女がトイレに向かって行った。

水城が私を見る。

「ごめんな。ふたりで来て。」

私が少しびっくりして彼を見ると、水城は真面目な顔をしていた。

私は、やっぱりこの鋭い男は私の気持ちに気付いてるんだ、と確信した。

気付いていて、ふたりで来たんだ。

私が、3人の関係を崩すようなことを言わないように。

確かに私は、ふたりを前にして、みずきに思いを伝えることはできない。

みずきのことを欲しいって、どんなに思っても、私達の関係を壊すことは私にはできない。

きっと、この男は全部わかってる。

私は少し微笑んで水城に言った。

「ううん。もういいんだ。私。彼氏もできたことだしね。」

「そっか。そうだな。」

水城がコーヒーを一口飲む。

きっと、このことが嘘だったことも、水城はわかっているだろう。

「結婚…するの?」

水城がカップを置く。

「ん。まだわからないけど。したいとは思ってる。」

「そっか。うん。横井を幸せにできるのはあんたしかいないよ。」

水城が苦しそうな顔で、私を見つめる。

「幸せにしてあげてよね。」

私がニツコリ笑って言うと、

「約束する。」

真っすぐな目でそう答えた。

「なにになにに?何の話してるのあ???」

パタパタと、彼女が席に戻って来た。

私はその無邪気な笑顔を見て、小さく微笑んだ。

「うん。もし、ふたりがほんとに結婚したら、横井、おもしろいことになっちゃうなって。」

私の言葉に、水城がアハツと笑った。

彼女は一瞬考えるような顔をして、あぁっ！と言つように、顔一面で笑った。

「そうなんだよねえ！！私、『水城瑞季』になっちゃうんだよねえ！！』『みずきみずき』って！！どうしよっかぁ、悠太あ。」

「別にいいんじゃない？」

水城が笑いながら答える。

そんなふたりを見ながら、

「とりあえず私は、水城を悠太、横井を瑞季って呼ぶようにしようかな。」

笑顔で言う。

「そうだね！そうして！もう、次会う時からそうしちゃってよ！！」

冗談でも、結婚したらって、ふたりが結婚したらって話を、水城が普通に受け入れたことに、『瑞季』は嬉しくて仕方がないようだった。

そんなみずきを見て、私は、もう何度も味わったあの締め付けられるような気持ちになった。

水城に、水城悠太に愛されてるって実感した時に見せる、横井の、横井瑞季のあの顔。

世界中の誰よりかわいいあの笑顔。

私が大好きな笑顔。

何度も独り占めしたいって願った笑顔。

みずきが悠太にその笑顔を向ける度、息が出来なくなるくらい苦しかった。

でも。

もうやめようって。今はまだ、思っているだけで抑えられてるこの思い。

きつといつか爆発する。

そんなの、私だって望んでないから。

どうしたらいいんだろって考えてたら、今まで浮かばなかったのが不思議で仕方ないくらい、簡単な答えが見つかった。

この恋を、もう終わらせよう。

一度でも、自分の中に浮かんでしまった考えを無視できるほど、私は強くない。

きつと、自分ではわからないだけで、私はみずきを思い続けることに疲れてしまったのかな。

もうやめよう。

そう思った時から、驚くほど、私の中は軽くなった。

「映画の時間、まだ大丈夫なの？」

「あつ。そろそろ行っただ方がいいかなあ。」

瑞季が悠太を見る。

「ああ。うん、行こうか？」

悠太が私を見て、

「大越は？何時待ち合わせなの？」

と、『彼氏』との待ち合わせ時間を聞いてくる。

「んー。まだもう少しかな。私はここで待ってるね。」

「えっ！？じゃあもう少ししたら、ちぐさの彼氏ここに来るの！？見たいー！！悠太っ。うちらももうちよいここない！？」

瑞季の言葉に、悠太はチラッと私を見て、

「いや、俺も見たいけど、映画間に合わなくなっちゃうから。また今度、ゆっくり4人で会おうぜ。」

なっ。つと、悠太が私にふる。

「うん。いきなりだったら、彼、緊張して変になっちゃうかも。」

「あ。そつか。人見知りなんだもんね。それに、ちぐさも久々のデートだったりするわけか。邪魔しちゃダメだよねえ。」

うんうん、と頷いて、

「じゃ、いこっか。」

瑞季が立ち上がり、悠太の服を引っ張る。

「じゃあ。またな。」

「またねえ。ちぐさ。彼氏によろしくっ。」

ふたりがレジに向かっていく。

「みずきっ!」

私が言つと、ふたりが振り向いた。

「あれっ?どつち??」

そう言つて、瑞季が笑った。

水城はまっすぐこっちを見ている。

私は、小さく手を振って、

「またね。」

と言った。

それだけで精一杯だった。

「またねえ！」

瑞季は、私の大好きな笑顔で、手を振った。

「ありがとうございましたあー。」  
「  
店員さんに見送られて、  
ふたりは外へ出ていく。」

私は、たくさんの人で溢れている交差点に吸い込まれていくふたりを、眺めていた。

みずき。

あなたを諦めるって決めてから、こんなに私の中は軽くなったんだよ。

あなたのこと、好きでいるのやめようって決めたら、私の中身、こんなに空っぽになっちゃったんだよ。

こんなに。こんなに、私、みずきでいっぱいだったんだね。

「みずき。」

小さな声で呟いてみる。

ずっと。

呼べなかった名前。

呼びたくて。

あなたを名前で呼びたくて。

でも、『横井』じゃなくて、『瑞季』って、一度でも呼んだら、自分の気持ち伝わっちゃいそうで怖かった。

何よりも伝えたいことなのに、誰よりも伝えるのが怖かった。

みずき。あなたが好き。

どうしても言えなかった、たったひとつ。

でも。

今度会う時からは、『瑞季』って呼ばなきゃね。

ふたりが結婚した時の練習に。

窓の外を見ると、もうふたりの姿は見えなくなっていた。

「みずき。」

もう一度呼んでみる。

「みずきい。」

私の中の、ぐるぐる回ってたなにかが、溢れ出てきた。  
私の、みずきへの思い。

私の中で、ずっとずっと長い間押し込めてきた気持ち。

「みずきい…。」

「みずきいい…。」

一度も伝えられなかった思いが、流れ出した。

あやしてくれる人もいないのに大粒の涙を流す私は、とても滑稽な  
んだろう。

でも。

今はいい。

涙が枯れるまで。

みずきへの思いが、私の中から流れ出てなくなってしまっただ。

(後書き)

読んで下さってありがとうございます。よければ感想お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7273d/>

---

オレンジアイステー

2011年1月20日02時36分発行